

溪

稜

NO 20

長らく中断していた会報がようやく出るというので巻頭言というのを頼まれたのだが、かつこうよくよめることもできず、思いついたはまにだらだらと書かせてもらうことにする。

書翰から会報の綴りを引、張り出して見ると、創刊号は昭和三十二年三月（会創立は三十一年十二月）、以後同年十二月までに六号まで発行、三十三年は七号九号、三十四年十号、三十五年十一、十二号、三十六年七号、三十八年から四十一年までは毎年一号ずつ、四十二年はなし、四十三年から四十五年まで一号ずつで十九号まで、四十六年はなしで今日に到っている。

創刊当時のようなペースは無理としても、その後の沈滞はやや淋しい。

それでは会の活動、それは何と云っても山行そのものであるが、山行が沈滞したのかと云うと、そうでもない。むしろ山行はより高度に、そして活発に行われ続けていると思われる。（多少のマンネリ化は別）。

そこで会報とは一体何かということになる。会報や雑足の記録が、単にコースの説明の域を出ないのなら、さういふ資料は、少くとも創立当時を数えて十分豊富であり、特殊なコースや山域を担当しているパインニア的な山行のさういふ山行がうちの会に少なくなつたことも事実だ。でない限りガイド的な価値は少なくなつて来た。また、自分は何級かルートを何時間でやったという記録の誘示の場でもあるまい。

しかし、会として、いつ、どんな山行をやつたか、そして、その結果どんな反省があつたかを会の記録としてまとめておき、その後の参考に、あるいは他の会との情報交換に役立てるという意義は、もちろん重要である。たゞそれにはもう少し定期的に、そして単にルートと、コースタイムの羅列に終らないような内容が欲しい。

ところでさういふ記録という面以外に会報をまったく血の通つたものに高められたいだろうか。それは、今の若い人達が、会報に技術書とか、岩場の説明書を讀む程には、例えは大層喜ぶとか、あるいは田部重治などの本と新刊本ということに関連があるのではなからうかと思ふのだが……

山に接し、山に惹かれること自体に純粹な喜びを感じ、それだけ自然に望に現れたような文章、山における自分の喜びや、世を伝える文であらば、文の巧拙はとまかく、少くとも同じ山を愛する人間の心を通すにはおかない。それでは会報同士の、あるいは他の山の仲間同士の心を通す役割をする。さういふ会報になることを期待するのである。

巻頭言にかえて

八海山 地域研究のしめくりとして

大崎口より屏風沢

高倉沢 西不動沢

トランシーバーの使用について

山縣 昌彦

石川 護朗

石川 護朗

石川 護朗

飯豊連峰 (昭和四十五年度夏期合宿)

縦走隊

石コロヒ雪溪より飯豊本山

女子隊  
男子隊

中村 博明

笠原 正夫

バテバテ山行記

思いついたままに

歓迎山行に参加して(昭和四十五年度新人歓迎山行)

初登峰の記録

穂高屏風岩第二岩溝ルート

ハッ缶西壁(昭和四十五年度冬期合宿)

中山尾根

南 有二

吉野 武

南 有二

吉野 武

矢嶋 実

15 14 13 12 12 11 10 9 6 5 4 2 1

小同レクラック

南 有二

15

地蔵尾根

奇蔵 禎蔵

16

谷川岳南面集中 (昭和四十五年度九月合同山行)

オジカ沢

細井 信幸

17

モツゴイ沢

笠原 延夫

18

北岳バットレスの記録

第一尾根Aガリールルート  
第二尾根Bガリール側凹角ルート

吉野 武

19

初めてのりの倉沢

中村 博明

20

三瀬沢

池上 健二

21

山のおもいで 一二題

吉田 典子

21

ランプの火 (2)

石川 護朗

22

ヨーロッパ日記 (2)

奥園 義輝

24

昭和四十五年度会員山行一覽

庶務 係

32

八岐山

# 八海山

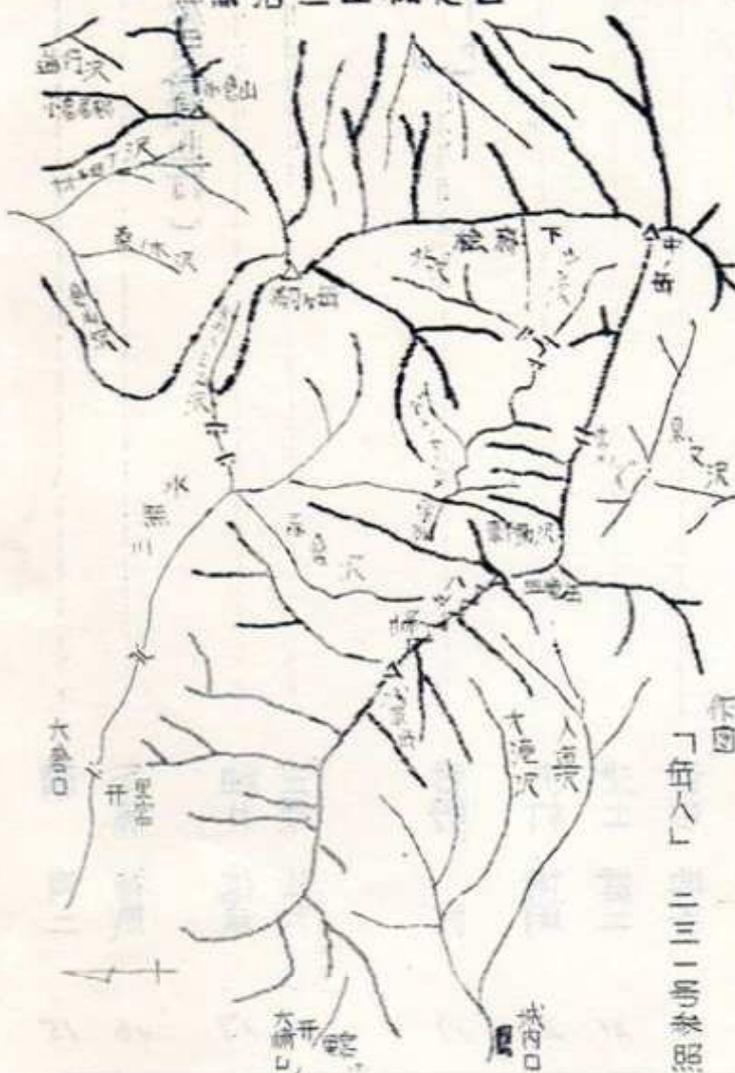
地域研究のしめくりとして

飯後三山は古来より魚沼三山の名に  
よって知られている。孝豊世帯にある  
關係上、登山道はほとんど尾根筋に切  
り開かれており、美谷や岩場はバリエ  
ーショナルルートのみといつても差しつ  
かえない。悪絶をもちつてなるオツルミ  
沢、真沢等を有する水無川には未だ  
湘行されていない天もあり更に高差差  
八百米はあるつかという飯後朝ヶ岳佐  
梨川奥堂は川崎山岳会により紹介され  
たが、一時入山を禁止され、再び条件  
付で昭和四十五年十月一日より入山許  
可になつてゐる。播磨期の八海山は、  
昭和六年一月に慶応大学山岳部が城内  
口より池の峰附近を経て登つて以来、  
第二次は昭和三十四年一月長岡山岳会  
によつてなされたのである。中ノ岳は  
昭和三十五年一月長岡山岳会が登頂し  
ており、三山の縦走は、昭和三十八年  
一月富士重工群馬製作所山岳部・長岡  
ハイキングクラブ・長岡山岳会の三パ  
ーティが成功して以来最近では二年に

一パーティが成功してゐるとのことであ  
る。この中でも早くから登られてい  
るのが八海山であり、登山者としては  
明治三十一年八月単独で大平成氏が登  
つてゐる。八海山の岩場はコンクリー  
トフロップのまうなもろい遊歩道の岩  
昭和四十四年五月六日岳東園吉壁、同  
年九月屏風岩正面岩壁が福期山岳会に  
よつて開拓されてゐるのみである。  
当会では昭和四十二年四月末、飯後  
朝ヶ岳小倉尾根からオツルミ沢の下降

に成功、他のパーティは城内口より大  
滝沢の試登および八海山登頂。以後八  
海山の開拓は着々として四十一年の五月  
には大滝沢・屏風沢・新開道に突きあ  
がる無名沢、主金沢左俣の湘行に成功  
今回は水無川の高倉沢、西不動沢、通  
徳隊として大崎口よりの三パーティを  
送った。なお同時期に他の会により東  
不動沢、オカメ沢、飯後朝ヶ岳マキタ  
ラッセル不問壁が登られてゐることを  
付記する。 石川護期 記

魚沼三山概念図



作図 「山人」 二二二一号参照

# 大崎口より屏風沢

五月三日(水曜) 五月五日

通信 石川誠明

池上線 池上線

五月三日(水曜)

大崎口へ向う本務と別川浦佐駅行のバスに乗る。今年も昨年同様三、四人補充の人が乗っていたがこれも途中で降り、おとほ式返りの切符だった。

水無川へ向うパーテーと遊園を約一  
大崎口からバス停「大崎山入口」まで下車する。三十米程降り民家の間を通り坂  
付。八海山龍谷寺の門前が崖を立折し  
八海山大崎社神社に立寄る。大崎山を  
る気配がたつて遊園寺に立寄る。大崎山を  
大崎正光少は二十人位入山しているとい  
の由。冬期の登山は少ないが、大崎山と  
そると尾瀬や荒沢岳から来るパーテー  
くもるようである。遊園の柵の下で  
池をたぐる。里宮へ向う途中の民家の  
庭にはゼンマイが庭に乾してある。開  
店中の茶店の前の木橋を渡り里宮の石  
手から登山道に取りつく。腰かさに誘  
められたのが野兎が庭にだして駆け去る  
二合目を途中まで登った。道は  
登る。一昨年の冬単独で来た跡には

ワカンジキを履いても膝までむくり  
どうにもならずここから引き返してし  
まった。

松の水のある小屋にでて左に登っ  
ていくと、鎖や鉄梯が分出でくるが危  
険なことはない。二合目を過ぎると、  
小平地の左側に小さい小屋があり地元の  
青年がここまで登ってきている。調  
子が悪くおぼつかない池上を降りたいとい  
うので大木止にする。よく見るとゼン  
マイがあのころに芽を出しており、根  
を残して夕食用に摘みとる。三十分程  
して歩きたす。この辺から雪が現われ  
る。尾根筋を離れ、沢を右下に見て違  
もと十四時十五分、時間になったので  
交信を試みるが山陰のせいかわづか  
ない。不動の滝への道は石は全片左側  
へ登ると全剛正装小屋で登る。ここは  
比較的展望がよいが相変わらず山陰は  
交信できない。先程の交信地点や戻り  
ヤッ。フと有難い。真壁や枝尾根を目標  
しきる。広い台地へ出る。このまわり  
がスるどわりけりにくいところだ。圓角  
に石折し硬い雪面をキップステッフで  
登り詰める。藪の中に入り、すぐ奥を  
山から尾根に合流する。地図上の八四  
の氷地帯である。ここまでは入ると次第

に展望がひろげる。  
三合目を過ぎ、尾根が右に曲るよう  
になると、左に大倉方面が見え、そこ  
に無名の沢が突きあけており、途中の  
沢筋に大きいフロッフが残っているの  
が見える。だらだら登りをいくと広  
い斜面になり、少し早いが道を右に入  
れた。城内方面の見える雪面にツェルト  
を張る。一一二〇米峰頂下の寒晴しい  
モモンガを仁トである。

夕景のは度々かぶり、食事後ゼンマ  
イと牛蒡、人参のデンスアラバアルコー  
ルを少々。おれで今日の夜れをいやす  
軽い散策のため外に出る。六日町から  
川出までの町は、こぞすれは雪を  
申はでは雪さそうな錯覚に陥り、天井  
にちりはめられたツェンテリアの如く  
フアンタズステッフな雪空、静謐な地  
上の夜景、善明に浮かぶ雪面に山に  
ることを忘れてしまふ一瞬である。規  
定の時間にトランシーバーのスイッチ  
を入れると、本務の取寄キーフリータ  
ーの元受る音が飛び込んでくる。ライ  
トを点滅しお互いの位置を確認する。  
水無川パーテーとの交信ができるの  
たことと報告し、明日の予定を連絡す  
る。交信終了後就寝。

に展望がひろげる。  
三合目を過ぎ、尾根が右に曲るよう  
になると、左に大倉方面が見え、そこ  
に無名の沢が突きあけており、途中の  
沢筋に大きいフロッフが残っているの  
が見える。だらだら登りをいくと広  
い斜面になり、少し早いが道を右に入  
れた。城内方面の見える雪面にツェルト  
を張る。一一二〇米峰頂下の寒晴しい  
モモンガを仁トである。

五月四日(晴)

七時〇〇今の本意この交信後出た。

明け方くもっていたが少しづつ晴れてくる。三十分程で左手に大倉口からの広い尾根が合する。この辺がう池の峰(一ニ九四米)にかけてのフナ林帯は藁宮地に好適なところである。数パーティが下山してくる。池の峰を過ぎると右手にヒョウタン池はひつり池があるそうだが、今は雪に隠れている。疎林を抜け、胎内溜りを捲いて登ると女人堂跡(六合目)である。窓まで雪に覆われたち、ぼける小屋がたつており、何んかが中にいるようなので小屋の横で休息。ここから見る浅草岳は、すっと上まで雪面が続いている。重い雪を上げゆっくり登り始めるが、いさゝ登ってみるとそれ程の斜面でもない。一時間余りで鐘と石碑の乱立する浅草岳に着く。ここまでくるとさすがに寒望がよい。千本松小屋とハツ峰、その左に敵後駒ヶ岳がその雄姿を現わしている。三年前、豊野達せり、ター他二名と共に下降したフナツルキもここから見るのがなり急である。十一時〇〇分、水無川モチがハナ沢方面にて雪崩発生。更に二分後、再度同方面で大雪

崩が発生する。池上を先に千本松小屋へ遣り、十一時十五分の交信を行なう。も本隊及び水無川隊とも交信できず。

千本松小屋との鞍部への敷米の下りは急なので、左手高倉沢へ落ちないよう気をつける。小屋の側に荷を置いて先行した池上が、ハツ峰の第二峰へ不動岳に人がいるようだが水無川隊らしいというので、第一峰へ地蔵岳の石を捲いて第二峰に行くことや水無川隊だった。西不動の本能が悪いため、迂りター他五人一緒に高倉沢を登ったとのことである。ここから見る高倉沢の石岸は、雪が降り過ぎたスラフ帯が続いている。遠く下津川岳、飯後沢山等が中ノ岳の右手にうっすらとぼんぼり見える。狭い道を急登としていると十二時十五分の本意この交信に成功し、水無川隊と合流、屏風道を降りる旨連絡する。

第二峰から千本松小屋まで五分程で小屋身横から下降する。初めゆるやかな小広い尾根であったが、まもなく尾根の左側に傾場が連続してあらわれこの傾から渡符が加って鎖を理るキに力が入らなくなり、下りが恐くなってきた。傾場を過ぎた八合目附近でトレ

ースがなくなると、屏風道は完全に雪の下に消えていた。

左に大滝沢、右を屏風沢に挟まれた幅三十程、長さ十数米程の雪板を通過するところから、板につかまっての敷下りが暫く続き、右寄りに下ると屏風沢に降りた。ここから五十米程が本日クライマックス、屏風沢の大滝下時である。雪淺になつていたので大滝の高さは知る由もないが、肩を息をする程バテていたので、後に先輩がいるというもののなかなか降る気になれない。トツクが慎重にステツクを切りひとりつつゆくり降りる。膝に力が入らないが、ステツクを追い五、六米で右岸のテラスに着くあたりで急斜面のため雪面と向い合つての下りになる。敷歩降ったところでスリッパを脱ぎ、右足下には雪の割れ目が無意味な口を付けている。すかさずピックを打ち込む。といってモバテていたので単に滑落停止の真似をした位かもしれぬ。フレパスは眼の前だった。幸運だったが、これで一通を歩かしてしまいテラスまでのトラバースにも手を貸してもらう程だった。カイルを添りテラスから



後記

今回の山行以後、今日まで敵後三山周辺は大分様子が変わってしまった。山口部落の上流、広尾部落の奥にある東邦寺給南敵鉄東市の流すカドミニユウムが下流の秦師堂附近で多量に検出され、敵後米の産地も既にウドミニユウム公害に侵されているという。

谷川岳にパイオニアワークが残り少なくなってきた。登山者の目は次第に未踏査の地に向けられてきている。八海山で未だ残っているところは、浅草岳池の峰にくい込む西面のツボ川支流の清水沢、箱ノ沢、玄坂川の支流の支流一部登られている黒又沢の支流である。

敵後期々岳は変化が激しい。佐梨川の金山沢奥壁のルンゼも登られてしまった。昭和四五年九月には僅く水会が北の岐川支流のタキノハナ沢からツキノハナ側壁を登っている。巻帳山の天狗岩は登られてしまったが、沢筋は巻き帳側を始めた面白い所が揃っている。思ヶ面山の前面にある標山(一〇一〇米)の六百ホ(一)の岩壁も数年前東

巻帳山の山にも登山者が入るようになっていくのは喜ばしい事ではあるが、

谷川岳のように観光地化の二の舞は殆どみたくないものだ。六十里越えや八十里越えを歩いて越えたのは昔のことで、只見線のトンネル(六三・五九米)の開通により、会津線と只見線が一本に繋がれたという。敵後は雪が深い。教会があれば昨年寒家になった吉ヶ原部落跡を守門山登山の際に立ち寄ってみたい。山と大とを考えるために……

石川護朗 記

読書文脈

◎ 近代日本登山史年表(昭和四十三

年七月、日本山岳の会、二百部限定

◎ 岳人(一九六七年二月号、一九七

一年一月号)

◎ アルペインガイド 谷川岳・敵後

三山(奇蹟一男、仲永竹治書、山と

巻帳山)

◎ 山と渓谷、山と溪谷読家引一

三三七十九号(昭和四十五年三月号

付録)

トランシーバートの使用について

石川護朗

山行にトランシーバーをとり入れたのは今回で二回目である。第一回目は谷川岳南面集中山行の時であったが、この時は沢の中の登高のため降りた沢同志でも電波が届かず役にたたなかった。

今回は三台持参したが、通信隊が一層感度のよいものを使用したためか、肝心の水無川橋は橋梁が鬼いのか全く役にたたなかった。トランシーバー自体、浦和市立高校からの借り物であるが事前の点検を怠った事は非難をささない。今回の使用にあたり気づいた点を列挙するとともに今後の種々にしていただければ幸いである。

○使用方法を知らずおく。○交信時間は日本山岳協会の定規時間帯を定め、地パ―ティと整合しない交信時間帯を避く。○交信時間帯を守り、立発時に互いに時計を合わせておく。○各パ―ティにコールサイン(愛称等)を決めておく。○交信の際にはなるべく電波が届くよう尾根の上とか、ピークに立つようにしたい。

# 飯豊連峰

昭和四十五年盛夏 我々は東北の雄  
飯豊連峰に初めて足を踏み入れた。  
各会員の休暇の関係で三隊に分れて  
したが、以下、各隊の行動を紹介する

## 縦走隊

日 程 八月八日〜十二日

メンバー CL 笠野 武  
SL 矢嶋 実  
中村 博昭  
南 与二

出発 九時半がこれ以上、釜岳直下の池籠帯に入り暮宴、さすが  
上入れないというところまで来てもらう  
崎のバックキングを走る  
おし九時五十分出発  
十時十分第一の夜し  
同五十分第二の夜し  
以上二つの夜しには多  
動式ロープウェイというしゃれたものが  
あり各隊員を連れ集しんで渡った  
第二の夜しで新潟高松生に迫いつき  
ここから這いつ返りれつのが競争が始  
まる。水がここを最後というところで  
食事ととり水筒に水を入れ十一時五十  
分出発。いよいよこれから四日間の山  
中生活が始まる。三十分五分の休憩方  
式で歩き出す。十六時三十分首がなり  
疲れている。眼前にピークが見え四名  
とも「あれが前か差岳では、あとすこ  
しで幕営地だ」と疲れている身体にム  
ネを打つ。しかしピークを越すとまた  
ピーク。何度も同じような二セピーク  
に出合い。また同じようなピークを見  
て疲れがドツと出てしまふ休憩。M君  
すつと這れる。いくつ越えたらうか後  
線に出。眼前に大きなピークを越え  
ぬしと黙して歩むのみ。十八時十分

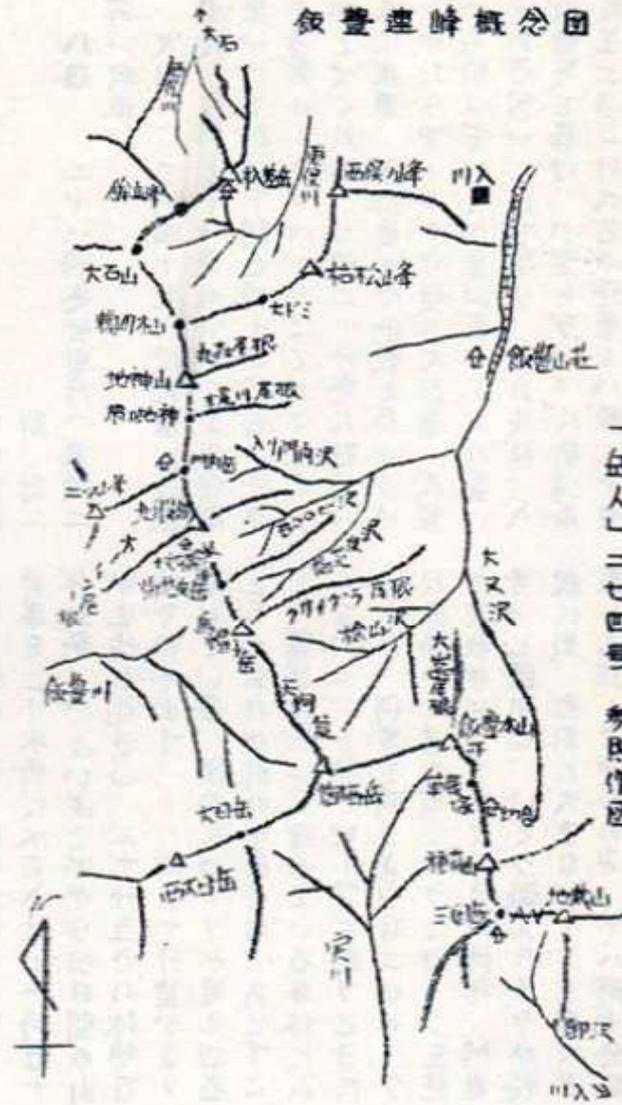
八日 二十一時発秋田行(鳥海二  
号)乗車

九日 三時四十分坂町着 仮眠

の後、六時五十分発米沢行(蒸気機関  
車)にて越後下関七時十二分着。先発  
の吉野チーフキパンツにて我々三人を  
向えてくれる。七時二十分発大石行バ  
スに乗車。登山者我々他数えるぐらい  
しかおらず。二十分程で大石着。我家  
(名前は忘れたが登山者カードの置い  
てある家)に立ち寄り、山の北麓、入  
山者等を尋ね、小型トラックに新潟高  
松生二名と計六名で便乗し八時三十分

十時 眠れさめたら五時、四時三  
十分起床ということだったのだから、  
M君はまたよく眠っている。五時十五  
分M君起き食事の用意。朝の空気が本  
当にウマイ。六時三十分朝食。ジフイ  
ーと(梅ヶケメン)、ミソ汁、紅茶、  
七時四十分出発。今日の行動予定は八  
時間ぐらい歩いて朝西岳にて幕営。ま  
た女子隊と合流できる日でもある。ハ  
差岳三両点を七時五十五分に通過。八  
時二十分立派。写真等を撮り同四十  
分出発。九時四十分輪母水子。M君バ  
ッテ始め休憩。出発さぬM君雪道に降り  
雪をとってきいたのでハチミツ入りンヤ  
ーベットをつくり早い朝食にする。  
非常にウマかったが、ここでの大休止  
が今日一日最後まで尾をひく結果とな  
る。十一時十五分輪母水山通過。同五  
十五分地神山。十二時十分出発。門内

飯豊連峰概念図



「岳人」二七四号 参照作図

岳で再び昼食をとることにする。とにかくスケールが大きく前に見えるヒークが門内岳であろうと甘くみるとんでもないことが再三である。十二時三十五分扇の地獄、同四十五分出発。杖葉杖をついた登山者に見会う。僕が彼の立場だ。たら荷をおっぱりだして……それ以前に山へ登らないだろう。十三時十分門内岳。昼食にする。カイドスツクの水場はアチにならすかとい目に合う。御西岳のほうから来た登山者に御西岳までの所間を聞いたところ。五

六時間かかるとの返事に大あわて食事までそこそこ同五十分出発。十四時三十分北股岳。女子隊の×もあり九時四十分到着とのこと。同四十分出発。十文字鞍部の小屋を通過し水がなくていっているがリーター休むことを許してくれず。こらいう時のリーターは悪より恐ろしい。十五時十五分カイラヤ岳通過。いくつものピークがあつたがみん二十分三十分で越すことができた。同二十分与田池の鞍部で池の水を汲む為休憩。池の水鉄くさく

マ飯めずとこの池もみん赤く濁っている。M君雪渓まで降りて生き返るような冷たい水を汲んでくる。おかげで全員汗んとうに生き返ったように張り切って同三十分出発。同五十分鳥幡岳くもっておりほとんど影は見えないので通過。十六時三十分御手荒池。天狗の庭へ行ったら休憩ということではある。同四十五分天狗の庭。リーター通過を宣言。僕には×シをお預けになった大みたいな見持。頑張って付いて行くが、天狗の庭から十分程歩いたところを離れてしまい、ひとり休憩をとる。そしてたすぐ返ったところにYチーフ僕を待っていてくれた。二人でYさんM君来るのを待つ。十七時十五分荷を替えて現れる。M君の足元ふらついている。十七時四十五分ようやく御西岳の幕営地に着く。女子隊紅茶をもらって出迎えてくれる。アアの小さいような虫に歓迎され閉口する。十八時三十分夕食。カレーライス(ハカレ)汁といったほうが適當。ミソ汁。ベトコン。ラッキョウ。食後のひとときいろいろの話をして過ぎし二十時十分就寝。

十一日 同四十分起床 朝食は

ツイフェイス(チャールズ)・ミソ汁  
紅茶、M君が大変よく動いてくれたので準備が早くすむ。六時十五分兩Y氏はまだ寝ているが、僕とM君がさがかかっている中も大日岳へ向う。同三十分過ぎ小屋着。濃いガスに前進を躊躇したが、ガスが切れるかつたらかき返そうとのんびり一時間。希望も見え始め頂上直下へ来てしまった。M君三角点を見、あとから女子隊も来て合流。頂上という風が強く寒い。八時頂上をあとにして、四十分程で御岳キヤンパイトへ。寝ていた兩Y氏はナでに起き、荷の整理、テントの撤収とあつた下しく備達もまよって十時十分出発。お花畑の美しさに見とれノンビリ歩む。同五十分玄山平。今日の行程は余裕があるとのこと。シャーパーットをつくり、写真を撮りゆっくりする。十一時四十五分出発。途中のピークで女子隊に追いつくも休んでしまいまたもや先行されてしまう。十二時二十五分峠の飯豊山三角点ピーク。すこし下ったところで昼食。十三時三十分五分出発。同四十五分本山(神社)通過。下俣路にヒヤが笑いだしてくる。

十四時二十分草履塚に昔の物を見ながら十五分間の休憩。出発して五分もれないうちに雷法に出会いシャーパーット作りのあまた休憩。もう三回ほどまで休憩なしを約束して本日二回目のシャーパーット作り。砂糖がなくなってしまう。十五時十五分雷法をあとにして調を早め五分程前に出発した女子隊に切合小屋のところまで追いつき、追いつきが歩調をゆるめず黙々と歩く。十六時十五分幕宮子尾池の三回抵着。三回小屋には小屋番がおり水は五分程降ったところにあるとのこと。幕宮を覚えていたが小屋番より、女子隊の斉藤さん(現南夫人)の母上急病との無線連絡があったと聴かされ、女子隊が山奥さんと本人早速下山。十六時四十五分我々六人も近場の水場を求めて地蔵山道下山決定。女子隊と同一行動をとることにする。途中の岩尾根には、滑っている身体により重くなった荷にバランスを採つのに苦労する。十七時三十分地蔵小屋。池はあったのだが汚く濁った。おり水場は使いものにならない。池をYチーフのなべを見つけて持っていたころとしたら小屋の親爺にうちの子のなべだといわれ大あめで、みんな疲れている。表情に笑みもとった。Yチーフ水場

を求めてすこし降ったが発見できず中の十五里の水場をあとにして下山する(すでに水一滴もなし)。十八時十五分上の十五里にて十分間の休憩。全員口もさかず黙って休んでいる。中の十五里で水場の指導線を見つけたが、かなり尾根から降りないとなくその道は荒れておりキジ場と変っていたので通過。一分歩くのが五分も十分も歩いているように感じる。十八時四十五分沢の見えるところまで来てみんなホッともした様子。五分程休憩して十九時五分細沢小屋到着。すぐ水にありフキテント設置に入った。だが、足は棒のようになりカッカイマモタモタするばかり。チーフに注意されても何が何だかさっぱり分らず。同四十分男子隊が設置している間女子は夕食の準備。一袋落して夕食にありつく。沢の水をたっぶり使ったソーメンにみんな口の休まる暇もなくあつた。という間に食べてしまった五人用テントに六人入り。今は過去となつた苦しめた道のりを楽しく語っているが、一宿しか残らなかつた水曜日(十三時)を六等分し最後の夜を過ごし、二十三時シユラフにもどった。

十二日 五時三十分早起き食事の用

意、七時朝飯、シシワイ、ス、四時を六人でナス焼き、ミソ汁、ペーコンと残飯整理もあり採養着点だった。八時十分今日で飯堂運峰とも別れなけりはならぬい。感無量である。同日十五分川入着然衆に入る予定だったが一軒しかなく通り過ぎしてしまふ。九時バスに乗り一ノ木へ。一ノ木で乗り換へ山郵駅へ十一時十四分山郵駅をたち、十一時二十八分多々方着。昼食をとったあと、十二時二十分多々方発へばんだいニ号一で十六時五十五分終着上野へ……

中村博明 記

石コロヒ沢雪溪より飯堂山

女子一隊

日程 八月八日(一)十二日

メンバー 山崎 満栄

SL 岡部 善子

斉藤 美子

山田 幸子

八月九日(晴)

長音原でバスと別れて小型トラックに乗り換えて二十分程時をかせき、いよいよ歩きはじめ「初めて東北の山に来たんだ」といいさかしている自分

に見がつく。この日の行程は、それほど登りもない門内沢出合までの道であるが、素地といっても真夏のことに暑さほかわらない。旭日清、飯堂山荘を経て温泉身を昼食をすませ、門内沢の手前から待望の大雪山がはじまる。前にサイトした人たちのおみやげの草の+きつめた地味よいテントの中で、第一日は終る。

八月十日(晴)

この日行では一番のヤマ場である石コロヒ沢雪溪がゆるぎないうちにと早登りも快適なヒッチで登る。ところどころ凍っているところがあり緊張することもあるが、それ以外に危険なところも無くカイヤギ小屋に着く。ここが天候とし、リーターを残して三人で北殿荘までヒストンし、頂上に男子バレーの伝言をおいておく。カイヤギ小屋からは、快晴の中で展望を望み、雪雲と雪溪では、特製のシャワーベットのほおって、一枚歩さを蒸発する。御西岳のサイト地も雪溪の近くにいくつかあり、そこで男子隊の到着を待つ。この日の夜は、男子隊の四人が加わりヒヤやかになる。

八月十一日(曇りのち晴)

山行前の予定では、御西岳で泊ることになっていたが、翌日の行程をきえて三国岳まで行くことに決まる。朝ロガスがかなり風が強く吹いていたが、テントをたたみ御西小屋まで荷物をあけて、空身で大日岳までヒストンする。高山植物の咲き競う中をのんびり往復する。解りに文子の池に寄る。雪溪は残っていない。池の水は使用するのをためらうほどよそれている。そこでサイトをこめていた女子大生達もこの水には開口したらしく、その日はサイト地をかえるつもりとのこと。私たちは雪溪の水にいろいろまぬる。私たちは雪溪の水で、快適にすこしたあとなりをなんともしの毒になる。御西小屋からは前日と同じ一枚歩きである。かの有名なうす雪草を見つけては歓声をあげ、この日を最後ともお別れなので、いざさかサレてしまふほどのんびりと、シャワーベットのとお花畑の展望を望んで、三国小屋に着くと、斉藤さんの母上が病気の連絡が会長さんより入ってあり、リーターと斉藤さんがすぐに下山し、残った二人は男子バレーに合流する。しかし三国岳でサイトする予定が、適当なサイト地がないので地蔵山まで行

く、一サレここにも水が、たまり水を使用できないので、とうとう御沢までくだることになる。あまり頂上でのんびりしたことを、少々後悔しながら、黙々と下り、星の出る頃御沢に到着。この日、一応縦走も終り、男子の邊んでくれたソトメンにきづみをついて、遅い夕食を終える。

八月十二日(晴)

川入まで平坦な石ころ道を歩く。あと二、三年もしたら御沢までバスが入ってしまふのではないだろうか。

この山行は天気がよかったことに加えて、北アルプスの夏のように混雑することなく、静かであり、たりのした徒走を采しむことができました。

コースタイム

ハ・九 長吉原(中)からトラック終点

ハ・一〇 湯身平(中)から門内沢出合

ハ・一一 出合(中)から中の島(中)からカイ

ラギ小屋(中)から北股岳

カイラギ小屋(中)から天狗の荘

ハ・一二 御西岳サイト地(中)から御西小

屋(中)から六日岳

御西小屋(中)から飯登山(中)から

三國岳(中)から地蔵山(中)から御沢

男子隊

八月十六日 朝 玉川口に列車が着

く、ローカル色ゆたかな小さな駅である。駅よりすぐバスに乗り込む。細い

山道をバスは長巻原に到着、三十分ほど休憩する。九時三十分飯登山めざして歩きたす。この頃より雨がパラつく

山道はなだらかだが歩けと高度あ

がらず、厚く飯登山に到着。昼食

雨少し残る。また歩き出す。トンボ目

につく。アブまたしつこく手を焼く。

二時過ぎ地竹原の午前でテントを張る

今日はここまで。夜、熊谷西米高校と

平安高校の熱戦に耳を傾ける。

十七日 早朝出発。昨夜と違い道が

険しく高度があかつていくのがわかる

八時過ぎ石コロ沢大雪渓につく。

眼前に広がる大雪渓をみる。大きい、

雪渓を登り始める。滑る。ヒッセルが

役に立つ。険しくなっていく。ガスが

我々をつつも、疲れた歩くのがいやに

なる。草付に出るが足が思うように動

かずどうにかカイラギ小屋にたどりつ

く。鳥糞多量。御手洗池と通過。途中

雪渓。高山植物が目に入るが疲れのため

め興味わかず。御西岳到着。今日はこ

こにテントを張る。ほっと一息。夕刻

より雷雨あり小屋に避難する。夜、小

屋より出。薄光で輝く山容に感嘆する

十八日 四時頃朝食の用意のため記

床。雲海と御西の山々を眺め

大日岳へ向う。夜来の雨のためであ

るう。ヤブを通過していくうちにヒツン

ヨリになる。大日岳より見る雲海は

海そのものである。山の頂きは海を走

る舟の如し。

御西岳に戻る。これより下山。途中

の弘法清水はアルンの多さに驚く。飯

# バナバナ山行記

## 飯豊連峰縦走

南 有 二

今日から始まる飯豊連峰縦走の出発地。飯後下関の駅に降り立った。パーティは僕を除いて他の三人は皆先輩なのでいくらか長も呆だった。

第一日目の暮野予定地。杖差岳目指して重いザックを背に歩きだした。最初のうちはコンドラに乗って川を渡ったり、集団の古姓パーティと会ったりして、こんな調子ならいいなと思いつつ、二回目のコンドラで川を渡って川原で昼食をとりその間、中村さんが先の養子を見に行つて帰って来た。聞いてみると、先はゆるやかな登りだよしるんていつていくせに、歩き出すとすごい登りの連続で、息を切らせながらさん中村さんに導かれた。今からこんな登りじやとてモじやないが死んでしまうと思

いながらもどうにか先輩たちについていった。

やっと夜裡らしい登りになって、もうすこしだなアと思つていると、その先にまた別の急い登りが待っていた。こんな登り降りは何回かくり返してやると杖差岳にたどりついた。

テントを張ってホエーフスの音を聞いたら、とたんに疲れが出てきて足の先が熱くなつた。今日の登りは一生懸命な、いたろうと思いつつ、空を見上げると教えきれないほど沢山の星が光つていた。明日の快晴を祈りながらツ

ニラフにもぐり込んだ。昨夜の祈りが届いたのか、絶好の登山日和だった。朝の雲海はまるで息づいていて、眺めたい。昨夜の激しい登りに比べると今日はハイキングみたい

いな気分が出た。ただザックが重いのが玉にキズで、あとは三三六十度昇降しながら次の幕営予定地御西岳目指して定を運んだ。

南の地氣を過ぎて内岳にさしかかる頃から、カイラギ沢の雪渓や名も知らぬ沢の雪渓が見えて来た。鳥帽子岳頂上のケルンの中にサ子隊のメソがあつて、「午前十時」と書いてあつた。僕たちの登いた時は午後二時頃だつたので、「サ子隊は早い分早いな」なんて話しながら御西岳へと急いだ。

二度目のバナは鳥帽子から御西岳の間だった。あとどのくらいで御西岳か判らないので矢は重く、ザックも重いあとで考えてみると御西岳まであと三十分のところだった。矢島さんや僕を僕って少し休ませてくれ、水を飲み、モンククラッカーをもちつた。

あの時のクラッカーはうまかつたなァー。しばらく休んだあとまた歩きだした。先に行つた吉野さんと中村さんが途中を待っていてくれた。へちよっとはずかしかったな。それかうしろく歩いたら前方が急に広くなるので目指す御西岳の雪渓が見

えてきた。その中程にテントを張って  
いる女子隊の姿が見え話し声が聞こえ  
てきた。皆んなでコールを返した。す  
ると女子隊の人たちが手を振って僕ら  
ちを迎えてくれた。僕はあやうと着  
いたと思いを立てていろいろのものが  
になりしやがみ込んでしまった。  
明日はカスミの山たちと大日岳へ行  
くことになっていたので、明日こそバ  
テないでこれに参った。その夜は寒し  
かった。でも雪の積もりで寒いくら  
いだった。たけともまあよくここま  
で

思い出ついたらまた

まき野 武

又しおりに謀走をし、山の広さを見  
たよ  
N氏はためだな……こんな急な登り  
かなだろかたなんでよー  
大きいな……高山植物もきれいだし  
——谷も深いし、野営も多いーこ  
こはここだ……  
天気がいいし、ショートパンツだし  
もったくいいや。  
こういふところはノンビリこんと歩  
こうや

昭和三十五年 新人歓迎山行  
昭和45年4月19日 表丹沢  
◇ 歡迎山行に参加して ◇  
南 高二  
丹沢は何度か歩いたことがあるので  
不安感というものはあまりなかった。  
それでも自分の登る沢は、セドノ沢右  
俣と聞かされて内山大丈部がなと思  
った。けれど経験者が先輩たちがつ  
いていくからと思うと、不安よりも  
期待のほうが先だった。  
友だちの話を古くは初め者向きた  
といつてバカにしていたけれど、大  
気をつけたらといわれたいで、僕  
は大志が登れるかなと思ったが、結局  
はきいてしまった。  
途中F5の二段の滝でちょっと油断  
して足をすべらせてしまった。岩が滑  
りていたせいもあると思うが、上でサ  
イル確保をしていくれた細井さんに  
引きあげてもらった。細井さんすかま  
せんでした。でも沢登りは思っていた  
よりも面白く文化があつて楽しいなあ  
と思つた。

歩いて来たものだと思つて、井とみ自  
分の足を履いた。他人の足みたいだつた。  
雪がけら流れる水の音を子守歌にいっ  
つか夢の世界に入つていってしまつた  
大日岳には割合早く着いた。みんな  
で記念写真を撮り、十五分ほどテント  
に寝て来た。そしてバックパックを荷  
ませ、最後の一日だと思つてサククを  
背にした。足とりは軽かった。  
今日一日この山ともお別れだとな  
と思うと、何となく淋しかった。  
M氏はよくシャベットを作つたな  
……パテもしたけれどよー  
玉葱の皮に人の顔が入つていたよ。  
今日も暑いし、なだらかなスローア  
だじ、休もうや。  
あそここのピークにさつきから人がい  
るぞ。この暑いのによ。  
なんだみんなか、オー、トンボメカ  
ネだ、すげえや！  
じゃみんなを行こうや  
今日は朝沢小屋までくたさう。  
うおいな、このノウメン最高だよ  
これで縦走も終わりか……  
思い出の飯出運轉

この山から登るを目ざし、坂さへあ  
れば先輩たちと一緒に山へ入り、早く  
一人前のクライマーになりたいと思う。

# 穂高岳屏風岩第二岩溝ルート

昭和45年5月2日

メンバー

奥園美穂

吉野 武

小林 一郎

五時BC巻。天気曇り。まだ誰も登っていないところを登ると登攀が滞る。

第二岩溝ルートは、三のガリーより屏風岩を見ると、中央カントの石に二本の凹角がすぐ眼にとまると思う。左より二本目の凹角が第二岩溝である。

三のガリーより下降して橋尾谷をすぎ雪渓を登る。中央カントに行くリッツェリ石へ廻り、第二岩溝取付き着。七時登攀開始。一ピッチ(以下Pに)雪渓を石上にトラバース。2P凹角を目指して雪渓を直上しツェルンド内にてビレー。3P早くもハーケン。アブミと使いハンタを敷いて雪渓を直上。4P危な雪渓を登る。雪面が堅く体を安定に保つのが苦しい。5P頂上のハンタを置いて左へトラバースし凹角に入るが悪い。凹角をぬけてスラフの登

りになる。6Pスラフをすこし登り右へトラバース。凹角に入る。凹角の中は水いれ、スタンスともなく灌木に。つかまり強引に登る。灌木にてビレー7P凹角を直上。クサビ、ハーケンを打ってアファミで直上。凹角をすきるとスラフである。8Pスラフを登る。途中不安定な取付を右へトラバースして

登攀終了である。終了十八時。雪庇を2P登り北壁ルートの終了点にてビバーク。十九時三十分。登攀を開始してから三人で頬を台せるのは初めてである。我々は完全の喜びを分かち合いながら長いビバークに入った。翌日、北壁を下降してBCへ帰来す。

吉野 武 記

第二岩溝ルート 野 吉 凹 岩 体



昭和四十五年度 冬期合宿

八ヶ岳 西壁

昭和四十五年十二月末から翌年一月始め(年末年始)の休暇を利用しての冬期合宿は、年度当初の明神岳周回とした計画よりも大きく後退し、八ヶ岳(赤岳、徳岳)西壁と十月十五日の山岳会を決定した。

昨年(四十四年度)橋尾尾根からへ天降に走された関係もあるが、橋ヶ岳の頂を踏んだ大会としては、あまりにも容易に合宿地を決定したようには思わぬ。会費補充を前に、ききと増したことをお許しくたさい。

◇◇◇◇◇  
八ヶ岳への冬期合宿は、昭和四十五年十二月三十日(一)一月三日までの五日間と決定した。参加者(十六名)ならぬに行動については次のとおりである。

◇参加者  
牧野等雄、辻勝四郎、藤原健二、篠崎、吉野武、吉田毅一、木

田清、矢嶋実、細井信幸、斎藤英蔵、池上健次、中村博明、笠原延夫、南有二、足田豊、岡部益子、青藤美子

◇行動

十二月三十日  
前夜新宿を発ち、十四時頃赤岳駅、泉へバスで到着。チーフリーダーより以後の行動について説明を受け、三テントに分散、各テントことに行動をとることに決定。

十二月三十一日  
◎坂巻佐登頂隊、し吉野武、水田清、池上健次、斎藤英蔵、岡部益子、青藤美子、篠崎  
◎裏同心ルンゼ隊、し牧野等雄、辻勝四郎、藤原健二、矢嶋実、細井信幸、中村博明、南有二、笠原延夫  
一月一日  
◎中山尾根、辻勝四郎、矢嶋実、細

井信幸

◎日、佐藤、水田清、斎藤英蔵

青藤美子

◎大同心隊、藤原健二、黒田豊

◎小田ヒクラック、吉田毅一、笠原延夫

中村博明、南有二

一月二日

◎赤岳地蔵尾根、青藤英蔵、笠原延夫

◎赤岳主鞍、吉田毅一、中村博明

◎特攻ルンゼ、吉野武、水田清、池上健二、岡部益子、青藤美子

◎大同心ルンゼ、牧野等雄、矢嶋実、細井信幸

一月三日

予定を一日早く切り上げ、合宿は昨日で終了。自由行動ということである春は冬へ、またある者は白鍾湖スキー場へ足を伸ばし、ちれないスキーを楽しんだ。

◇◇◇◇◇

反省会の席上、各種係ならぬに装備の整備が指通され、食当の整い、装備の不備が打らださぬ、問題の多かった合宿を終了した。

# 中山尾根

期日 一月一日  
 メンバー 矢嶋 実  
 辻勝四郎 細井信幸

出発予定時間より遅れB.C.を出たのは午前八時、二十分程で中山峠に着く

ここから樹林帯となったがよくラッセルされてあり、B.C.から一時間で基部岩壁に着いた。日ノ岳稜のほうを見る

と木田君たちのパーティを登ってきている。取付には三パーティほどが順番待ちをしており、たいぶ待たされた。なので、石に三十米ほどまのりこみ、灌木帯を1ピッチ登り、それから雪道を2ピッチで上部岩壁に着く。ここにも数パーティが順番待ちをしている、待たされたのでこの間に行動食を食べる。動かずにじっとしていると寒い。活編二時間ほど待った。ハイルを履き準備をする頃には吉野君たちのパーティが登って来た。ここから上は雪があまり付いておらず、すべりやすかった。雪道であり、天気が良く、風は強くなる気配である。最後のトナリ水場は登山者のバンド

を登り通り込み数箇所に出た。途中に風が吹き出し、天候がくすんで来た。二十分ほど後に吉野君たちが登って来、彼等と木田君たちのパーティを待ち一橋にB.C.へ戻る

①	タ	イ	ム
B	C	標	壁
8:00	山	20	00
中	9:00	部	岩
9:30	基	9:30	部
11:20	上	11:20	部
12:40	上	12:40	部
17:20	上	17:20	部
B	C	標	壁



## 小同心クラック

期日 一月一日  
 メンバー 吉田 翠一  
 笠原 天夫  
 中村 博昭  
 南 貞二

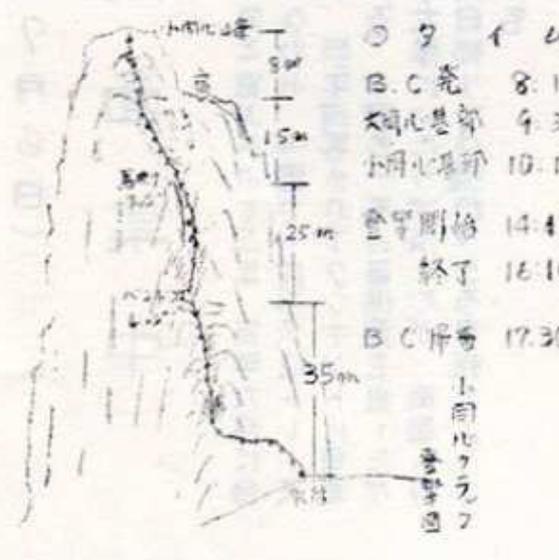
五時三十分起床、八時十分B.C.をスタートした。飯場のテント場からよくクラックした道を通り大同心岩に登ります。トレースされた道にマイセンが良く続いて、スユクモニツと騒いで、気が

持が良い。三十分を登ると身体が汗ばんで来た。約一時間位置すると大同心の基部に着いた。五分間の小休止の間に大同心の正面壁を見上げるとニパーティが取り付いているのがよく見える。今度来る時には登ってみたいなあー。B.C.と思いつながら基部を後にして、小同心クラックを取付子でトラグリースを始める。吉田さんの注意を聞きながらベルケラの張ったいやな箇所を過ぎ、今度は急登のラッセルだ。危い格好でトラグリースを続けると顔上で天山の人が聞こえた。ええ、やがて取付に着いた。先行パーティが沢山いるので教えて見ると二十三名位いる。その上クラックにはニパーティ取付している。この分だと大分遅くなりそうだと思う。なから、乙に分く待つことにする。取付からは遠く北アルプスや南の山々が見え、陽も当り水もわりと絶好の日。水もコッたと思いつながら行っている。しばらくして笠原さんと中村さん。それに吉田君の三人が登って来て、ここから三人とも取付にいる人数を見て驚いている。一時間位すると笠原さんと吉田君の二人は遅くなりそうなので先に降りて行った。それでニパーティ

テイに別れて歩き出すことにする。彼は中村さんと組む。笠原君は音田さんと思んて歩き出す。...

約四時三十分経って、べっとん取付けた。杖を杖う長く歩いたもので、笠原さん、音田さん、テイが先行する。彼はラストに、信と中村さんとは、手取り十一月に一度ニカルトを登って、いふので、最もカリーゴツテ西ノホを登り中村さんお祈っている馬車リ。...

いし崎も遅いので、すぐ下山した。橋越の麓まで下り、ヘトラウマースとして、大同丸の森のソマまで行く。ここから大同丸の麓部へトラウマースとする。...



# 地蔵尾根

期 日 一月二日  
メンバー ... 笠原延夫

小雪まじりの天候の中、笠原君と二人で赤岳目指して出発。行方小屋まで、地蔵尾根の中間ころに入って時々雪が降りてきた。...

赤岳頂上を眺めながら、北アルプスや南アルプスを眺める。三十分で二八九又、二米の頂上である。三六〇度大変にすばらしい眺めであった。特に東に眺める富士の姿が印象的。...

Time	Location
7:15	光
8:00	小里
8:15	行
9:15	杖
9:45	赤岳

45年9月合同山行（9月6日）

# 谷川岳南面集中

谷川岳の南面に足と踏み入れて三年、毎年九月に合同山行としておこなわれ、今回で一応各派はトレーヌしたようであるが、五年何等かのアクシデントに見舞われる山行である。今回も一名の重傷者を出したが本人のガンバリで大事にいたらず済んだが、南面における山行は、夜行日帰りでは強行すべき日程のようである。参加者十二名

## オジカ沢

木田 清

細井信幸

黒田 豊

ヒッコリー沢パーティーと別れて進行を続ける。よまなく最初の滝に出合う。左手の橋道へ大きく捲く。二番目の滝は小さいながらさかすかしい。左手のぬれた崖の壁を登って大きく高捲く。私と吉野さんだけで調査したがいやな所だった。この後ルンゼの常盤さんパーティーと別れる。なめらかなスラブの沢を快適に歩いて行くとネジレの滝

につく。左手の草付を登り、途中から大きく右手にトラウナーとして捲いた。この滝の上がうすく左手に葉巻のルンゼが落ち込んでいる。少し休んだ後、ルンゼの吉野さんパーティーと別れて三人になる。少し登ると雪蓋があり、アーチ状の大きなトンネルへスリーパー（ソックス）の中に入ると水音が落ちてきて冷たく、おまけに今にもくすれそう。いやな所だ。早々に抜け出す。この後三十分ぐらいでくすれたそうである。大滝を先行パーティーがあり、彼らの登っているのを見ながら待つ。彼らが登るまでに三人落ちた。ひどいのは大

音響とともに滝壺に落ちた人がいる。居残りをしていたが目がさめてしまった。私も大滝の下部でスリップしたが無事通過。この滝は二段になっている。下の滝は非常にゆるゆるしているために悪い。上の滝は石きの並んだ壁を登るのだが、我々は滑んでいくためになお右手のスラッシュの壁を登る。途中小さいハンケがあり黒田君が苦戦したが無事越えろ。私は面倒臭いのでゴボウで登る。ここでだけ、この時間をくつてしまった。ここからは滝の登りはなく草付とヤフコさである。一はらく登っているとき色を屋根からコタ後山のコーンルがある。たぶん私のハテをオレンツ色のソックスが目についたのでろう。時々モートルをさえず、いやな草付をトラウナーをさえて、ヤフコさをいっせいで出した。雨が降りそうなのでほとんどぼし。よまなく稜線に出た。ここからオジカの滝まで十分ぐらいたった。

コースタイムはよく覚えていないので書きません

細井信幸 記



# 北岳バットレスの記録

## 第一尾根Aゲリールト

昭和45年6月6日

メンバー 吉野 武 吉野 武

不田 清

同野蓋子

八時、二俣より雪道を登りバットレス沢に入る。Bゲリール大滝を正面より登って緩傾斜帯に出る。緩傾斜帯は、オ一尾根より第五尾根まで続くバンドである。オ一尾根には正面ルートとAゲリールの二本のルートがある。以下はAゲリールートの記録である。

1P、ゲリールをつめるが浮石が多い。2P、ゲリールより石の稜を登る。3P、そのまゝ稜を行くと、オ一尾根の側壁になる。4P、左に浮石を脱おっけながらトラバースして、オ一尾根の穴テラス着。5P、リッツの登堂に入る。今迄と違い、浮石もなくサイルを伸ばす。6P、このルートのキーポイントの小ハンクの乗り越えとある。トツアはハンクの中央にあるクラックにだいぶ苦戦して、何度も登り直してを登りトツアを交番。トはハンクに取り付いて方々なくハンクを載える。7P、リッツ

を登りオ一尾根の終了点に着く。トツアに迎えられ、オ一尾根を終了する。

我々の完全登を祝うように雪が降る中を北岳山頂を目指す。

下降は、ハ本背身コルより大滝沢をクリセードにて二俣着。

## 第二尾根Bゲリール

昭和45年6月7日

メンバー 吉野 武 吉野 武

不田 清

同野蓋子

二俣Bより長い雪道を訪めて、バットレス沢より大滝を登りオ一尾根取付三へ、初めて丸坊に来た時に目に映った、逆三角の空室に、自分の足跡を印したのと思ひ、後で何度が北岳に来た今迄五本のルートを登り、今、空室の取付点に立つ。

5Bゲリール側即ちルート

1P、空室の凹角を直上するが、浮石だらけでスタンス、ホールドも小さくかなり悪い。凹角よりカンテヘトラバースして二俣位で凹角へ、凹角を登

り小さい岩穴に石足を入れてヒレ。2P、凹角を上るハンク目指して直上ハンク下を右にトラバース。ホールドスタンスが遠く。またがぶり気味でなかなかふんざりがつかない前である。大洞穴を抜けて三々四米行ってヒレ3P、リンネを二十五米登り、逆三角の雪に立って登堂終了。

このルートは浮石が多く、トツアが落ちると、サイルに融けて落ちる落石の為に、確保者のところにほとんど落ちてくる。またこのルートにはハーケンを打つリスも少なく打つても岩が脆いので頼りにならない。浮石と岩の脆さの為にたいぶ時間を費した。逆三角の頂より左ヘトラバースしてオ一尾根を下降。

今回の山行には、スキーをBC直上げたので岩の架しマフラススキーの架しでであった。

二俣で全員スキーを乗り込む。明日下山であるが、また北岳に来る時は、残雪期に来て、もう一度Dゲリール奥壁を登って見たいと思う。

また、スキーも……

吉野 武 記





# 沢

池上健次

北アルプスは今回で三度目であるが  
湖沢へ入るのは初めてである。僕は前  
から湖沢へは、是非一度行ってみたい  
という希望を、山を始めてはもろくた  
った頃からいだいていた。

湖沢は、写真や文章によっては多少  
の知識は持っていたが、やはり写真や  
文によって現れられていたより、現  
実に自分の眼で見、歩いたことは、こ  
とわざにもある通り百聞は一見に値す  
る事がまさかと証明されてしまった。  
今回の山行は、九月の中頃行ったの  
で紅葉はまだ見ることほできませんで  
したが、その代り湖沢より夜空にくっ  
まりと浮んだ満月を見る事ができ、様  
は湖沢がすっかり覚に入ってしまった  
夕暮れだというのに、眼前には奥穂高  
岳、左には前穂高岳、右手には北穂高  
岳から槍ヶ岳、後ろには峰ヶ岳が見る  
ことができた。本当にこのような天候  
にめぐられるのはめずらしいことによ  
うに思われる。湖沢をこのような天候

## 集稿原

会報係では、たたいま原稿を募集しております。記録、紀行、論  
文、詩、その他山にすこしでも関係することならなんでも結構です。  
原稿は、山誌会の席上か、あるいは左記へ送付してください。  
〒22 富士見市大字鶴馬三三五三 中村博明

## 山のおもいで

二題

吉田典子

一、暑い夏の思い出

はるかかたに、なごみえ立つ間の岳に  
思ひす目を見ゆる。真夏の暑い空のも  
と、ませかえるような深緑の中で私達  
三人は、ふさ出る汗もふかずに足を止  
める。涼風をせき止めるが、かのように積  
たわっている巨岩には目もくみず、三  
人おもしろいおもしろい河原の小石に疲れた  
腰をおろす。そして再び見上げる間の  
岳の遠きに見ゆる箱を見合せて、もう  
そんな私達の所持とはうらはらに、谷  
間の清流はとどめることを知らず、あ  
の巨岩をもさえ押し流さんはがりの勢  
いで流れていくのである。

— 南アルプス・荒川谷湖沢

— 北岳 —

二 晩秋の奥又白谷にて

フライマールは困難なピッケを終え、テラスの真中に腰をおろしクバコに火をつける。ゆらぐ煙の中から容赦なく飛び込んできた思ひす目を見張る。奥谷に身を染めた木立ちの群れ、そしてあの白樺の太木に守られて神祕的に輝くあの池を、ぞりて自分達の疲れをいやしてくれるであろうあの懐かしい天幕を……

「が、それらを支えているものは、かつすも自分達をする多くのみ込み、うとまろかまえている寒い谷間であり、いくつもの教えきれない若くすの群れである……」

「ああ、こう、秋の天気は爽やか、今見えていた池や木立ちも、そう、うっすらと白いベールをかけたかめいている。それはまたかまぼろしで、たかのよう……」

フライマールは、ふと気がついた時にはもうクバコの大を石な山道をまみ消しており、カイルを絡むなおいいた。やがてそのそばは、ゾリッゾリッと岩壁へはい上がり、ていくのであった。

——四峰正面

北条・新村ルート——

ランンプの火 (2)

悲愁の谷

解まりかえった谷に於けるこので、キ事を忘れる事はできない。ある人にとっては空細な事かもしれないが……

五月末の週日、写真撮影のため独り谷川岳を訪れた。休日は賑わった道も、今日はひっそりしていた。一ノ倉沢はかり奥まで雪が残り、一ノ沢の出合付近は、土や木の枝をまき込んでテアリボころがっていた。衝立スラフの出合まで行く。ピッケルを持っていないのでこの辺が限界である。滝スラフを流れる一糸の滝は、逆層の下部を跳んで雲の飛沫をあげている。一ノ倉沢の奥壁群、衝立岩、烏帽子岩、コックア状岩壁、遠い存在である。これらに二台のカメラのシャッターを切り、厭きるとトカケを止めこんだ。

石川護朗

けだるい春の日射しにうとうと午睡を染し、やがて腰を上げ、幽ノ沢に向う。雪解水は僅かな流れと化し、苔芽は萌えてあり、幽ノ沢の出合に平塔姿というにはあまりにも小さすぎる木標が立っていた。そこには一ヶ月余り前、幽ノ沢中央壁で宙吊りになったパートナーを確保しているうちに、カイルで胸を締めつけられて死亡したN会のH氏の名が刻まれている。昨日、教族が活けていったのが、竹筒に入った花束は少し萎えてはいたが、生命の証を残していた。生命の息吹と終焉のひそやかなる解途。遺難碑にはさして動揺しない私だが、遠い雪国で亡くなった母の遺体が見つかった。川の側の火葬場の雪景色とイメージがいつの間にか混ざりあってしまふ涙が溢れて来た。人間は小さな存在であり、歲月を経ればその存在すらも忘れられてしまう。

黒い霧リを見せた中央壁は物憂げに青  
空を背に幽ノ沢の山門の如く峙つてい  
た

照りつける暑さには口乾き足も重  
くなっていた。最後の登りとはいわ  
てはいるが、なかなかに足がいうこと  
をきかない。登りつめると待望の池だ  
った。一度は来たとい所と覆れ布つて  
いたものが眼の前にあった。

奥又白ノ池は狼狽の位置を占めてお  
り、北尾根末端の小さなカールと南麓  
高岳の東面、屏風岩ノ頭から常念岳・  
徳水峠方面、眼下には株川と眺望に恵  
まれ、コパイテソウとシナノモンバイ  
の群落に囲まれた池畔には風雪に捲め  
られた通称・宝ノ木・と呼ばれる笹  
が二本根を張っていた。池自体は蓋十  
分程度で溜水のせいが一米にも満たな  
い水底は見透かせないほどである。そ  
れでも水筒の水を飲み尽くしたYはう  
まそうに池の水を掬って飲んだ。

横尾の暮宮地から稜刈新道を経て奥  
又白谷を詰め、中畑新道から奥又白ノ  
池を通り五・六のコルから週沢へ抜け  
横尾へ戻る予定であったが、すっかり

ここが気に入りに致し、腹を垂らつて  
事にした。

後張りの天幕も岩登りに出かけてい  
るやうに人気が感じられない。幸い  
であるが、それにつけてもキャンプ場と  
ミ捨場の汚なさは目につく。

シャツプ一枝になり草いさめの中でお  
もいきり昼寝をする。目をとるとつ  
い先程の登山者が居  
い出された。……奥

又白谷に浴つて歩い  
た時だった。左前方  
にルンゼへ登るルン  
ゼンザ見えたあたり  
で中畑新道への取付  
を見失いそのまゝ奥

又白谷に入ってしまった。踏跡はすぐ  
消えてオツと奥まで雪渓が續いていた  
雪渓の間に一オビ島状に土砂が盛りあ  
がっており、その中ほどに古ぼけた一  
本の樫柱がたっていた。消えががって  
はいろがそこに記されたS氏は、山岳  
雑誌で時々名前をみかけたN会の若手  
ホーアであった。数年前の三月、前穂  
高岳東面を登るべく、リーターとして  
登山中数名の会員と共に雪崩に押し流  
され埋没してしまつた。N会は世界で



モトツアワラスの会で当時新聞でも大  
大的に報道されたのを記憶している。  
露天ほど汚れていないが雪渓は風紋を  
痛さがたくしよまっている。かすかに水  
音が聞え谷の奥には北尾根の四峰であ  
らうか、鋭角の岩峰がその雄姿を覗か  
せていた。左手に落ちこんでいる小こ  
いルンゼに、ニツコウキスゲが短い一  
生を謳歌するが如く  
咲き誇っており、寂  
寞とした谷における  
この黄色の群落は  
動と静の対峙のよう  
にあまりにも鮮やか  
だった。……けたる  
い暑さの中で一時間

位まとろんでいたろうか。Yはもう起  
きていた。茶臼尾根までかける。雪渓  
の融水の流れの側には、ハクサンイチ  
ゲ、黒百合等がみられ草花に彩られた  
アルアを縫って茶臼尾根まで一投足  
だった。奥又白ノ池は言わすもがな下  
又白谷を隔てて明神岳の主峰を仰ぎ  
左下方にはひょうたん池が瓢箪形を描  
いていた静寂なまでの奥園の周辺にも  
そろそろ日射しが弱まり始め、数時間  
もすれば池畔の天幕にも住人が戻って

くるだろう。宝の木に別れを告げ、中畑新道をくだる足取りは軽かった。

# ヨーツパ日記 2

奥園義輝

六月二十九日

二人でメロリーの西壁へ向う。ガッサー氏が教えてくれたルートを行く。下部三ピッチのチムニールは悪かった。十六ピッチを終る。サテンニールヒニッテで一休みして、テナツチヨ頂上を往復する。壁の部分

が四ピッチ、やさしい登りであった。帰りが又長く、ベルギーヒニッテに着いた時にはまたたくのびてしまった。小屋の中の机の上に、肉や野菜が置いてあり、ガッサーの手紙があった。ハインは天たのである。

六月三十日

休養日。アルフを歩き回ったり、写真をとったりして一日ですす。小屋裏の水道がもう出なくなつたので、下の谷間から水くみをする。

七月一日

バイオレット・ツルムへ行く。ロリーノ・パスへの道は知って

いるので、もう索であった。テラゴ

・ツルム南西カンテに取付く。面白い登り。四ピッチで頂上に着いた。下りは懸垂で六ピッチ。アルベルト小屋に立ち寄り、スパアティを食って帰る。

七月二日

大して天気もよくないので、下の村まで食糧買い出しに行く。片道一時間はかかる。帰りに雨に降られピツヨ濡れ。

七月三日

村のレストランで食べた。スパアティは大変よくてうまかった。目の前にいつも立ちほだかっている山で、なんとも目ざわりである。やせしい山で、簡単に往復できた。羊が多いのはマイッタ!!

七月四日

ロリーノ北壁に取り付いてみる。八ピッチ登った所で下降。休

ぶくきいチムニールにぶつかったためである。この下降で、キ持ちのハーケンを全部使ってしまった。

夜、ガッサー氏が友達三人を連れてやって来た。三人共軍人である。うまい肉を食わしてもらった。

七月五日

一日中寝てくらす。藪から年寄りのハイカーがいく人も登ってきた。こんな所に日本人がいるということで大騒ぎ。ツョタイン・ホータスというカッサー氏の友達が山からおりて来て、三時間程話し込んで行った。大した面白い人である。

七月六日

今日は、生憎と悪い天気。少し薪割りをする。午後一時頃、ガッサー氏が来た。又一緒に薪割りをやる。我々のことがよほど気になるらしい。夕方雨の中を下って行った。

七月七日

日本はヒタ祭りこちらは天気が悪いので、一日中寝てすこす明日下ることに決定。

七月八日

乾きすぎてみたら井は真っ白ゆうべからの雨は、今朝になつて雲に変わったのである。十時半小屋を出る。この索しかつた小屋とも別れ。もう

来ることもあるまい。下のレス・オラン  
でスパゲティを食へる。ホルサーノボ  
戻り、例のホテルへ行きさすッッワ  
とあびる。

夜はカッサー氏の自慢のスライドを見  
せてもらう

七月九日 ガッサー氏の車でメラノ  
へ行く。一日メラノ観光である。きれ  
いだが大した物も無い。夕方カッ  
サー氏が迎えに来てくれた。

夜、チベッタへ行くことを薦めてく  
れたが、イヤさか迷う。

七月十日 いちおうチベッタへ行く  
予定で荷を整理してみたが、雪の方  
気来りしないので止めにする。午後荷  
の一部を駅まで運んでおく。夜、ガッ  
サー氏の客のパーティーに招待される。  
氏の友人が六人。皆夫婦である。楽し  
い夜であった。

七月十一日 ガッサー氏に別れを告  
げて、汽車でジュネーブへ向う。ミラ  
ノ、トリノ間で列車を間違えノバラで  
下車。再びミラノに戻り、ミラノの大  
きなドームの駅舎で待つこと三時間。  
イセル聖由でジュネーブに深夜中着。

七月十二日 夜中、警官にしつこく  
質問されヨリたぐ嫌な感じ。一日二回

しかるにモニ行のバスに乗り遅れ  
仕方なく電車をシャモニまで。町で知  
り会った門司山岳会の人に放えられ  
墓地の近くの無料キャンプ場に落ち着  
く。

七月十三日 お隣の門司山岳会さ  
んは後までモンブランへ。今迄すつこ  
こちらには天気は悪かったとのこと。我  
々もアラアラとガイマンの岩場へ遠征  
に行く。小さな岩場だが大変面白かつ  
た。

七月十四日 素晴らしい天気なので、  
二人で針峰群の裾を歩く。エギーユ・  
ド・レムから始まって、シャルモ・ク  
レボン、フレナユール、フワ・フラン  
そしてミテイへと続く針峰群の眺めは  
素晴らしい。正に岩の殿堂の名に恥じな  
い絶一景の眺めである。

モンタンベールはドリユヤゾラス  
の展望台、アランド・セギーユはッ  
シャモニ針峰群の展望台。  
アランド・セギーユからシャモニ  
まで歩いて下ったらえらくバテてしま  
った。

七月十五日 エギーユ・ド・ミデイ  
角壁レヒュファ・ルートを登る。素晴  
しい岩であるが少々難しすぎる。ニピ

今日のトラパスなどは六級である  
なヒッケで終了。下降中サイルが取れ  
ず苦労。最終のロープウェイに間に合  
わず、山頂駅に泊めてもらう

七月十六日 昨日から一緒に泊った  
フランス人二人は先に出ていったので  
我々はのんびりラン・モニへ下る。今回  
の痛矢は、アズミニ丁にクサビニケそ  
車にハリワン二本。危くヒッケルまで  
捨ててくる場所であった。

午後には近くの英国人のテントへ行き  
彼等の登山用具を見せてもらいたいのに  
物差に当たった。

七月十七日 天気が良過ぎる為、一  
人でミデイの頂上まで登り、バレー・  
フラツツユからメール・ド・クラスま  
で氷河を歩く。清い氷河である。日本  
にもこれら十分の一でも良いからあ  
ったらとまったくうらやましくなる。  
モンタンベールから、又電車に乗り  
シャモニへ下る。

七月十八日 雪殺パーティーのテント  
へ行き、ラーメンをもらってくる。彼  
等とは、どうも離れることはできない  
運命にあるらしい。  
夜、門司山岳会のテントで飲んで騒

七月十九日 モンフランへ向けて出

発、シャモニの駅前からバスに乗り

レ・スーシュの村まで行く。ここから

ローアウェイに乗り換えて、コル・デ

ボサの登山駅まで登る。駅といつても

駅なんて形も形もありません。僅

草むらに客転がって雪車を持つのであ

る。ニ・テ・エーケルの登山電車終点

から歩き始める。長い／＼登りである

一々所雪のクロアールのトラバースで

人が一人スリッパで引く張上げら

れていた。コテンパンにバテて、エキ

リュ・ド・フーテの小屋に着く。

七月二十日 二時四十分 モンフラ

ン頂上を目指して進む。アンザイレ

ン峠を引く。張って歩くためのもの。事

故防止のためにあるのではない。とい

うことがわかった。パロアの避難小屋

まで登った。雪がもうこれ以上降か

ないと言ひ張るのを、なんとかがんと

かたまりて頂上まで引く張っていった

頂上からの眺望は最高に素晴らしい

羽毛服を着込んで、ボンボンに服の上

った休めても寒い。早々に下山。下

りはコル・ド・ドームからボン水河に

入り、フラン・ド・セギューのローア

ウェイ駅に出る。十二時開雪の上はか

り歩いたのひま。悪くなってしまった

んでくらす。とどりの門司山岳会も、

又出て行つたので大変静かである

七月二十二日 M針峰へ行く。カラ

ン・ド・セギューから歩いて二時間で

取付着。岩のスケールは日本並。セセ

ックで登攀終了。下りは山羊、フティ

ジェルモのゴルからナンション水河に

降り立ち、出発点のアラン・デ・セギ

リュには早い時間に着く。

この小でさな池口かなるか素敵であ

る。

七月二十三日 休養日、碧波のメン

バーが遊びに来た。GHMの牛乳も

来て、世間話に話が咲く。夕方遅く、

門司山岳会のパーティが戻って来た。

ジョラスのウォーカー、樹を完全登であ

る。四人で一回のピバーク。かなり早

いペースであり驚いた。

七月二十四日 バビヨン岩稜へ行く

フラン・ド・セギューからは、取付ま

で一時間定らす。大変面白い岩稜で、

岩稜そのものの登攀は十三ピッチで終

る。ハイニユの面を後に取付最終ピッ

チを残して下降する。ここまで二十八

ピッチ。最終のローアウェイまで時間

がないので横たえて下る。

最終にかろうじて間に合い、おかげ

でシャモニまでテカサにすんだ。

七月二十五日 休養日、ゆうべはひ

とい雷雨であった。それでも夜が明け

るとカラリと晴れ上っている。昼に早

い夕立が来た。ひどい降り方である。

夕方警官が来て、後二日後に今の所を

出て行くように言う。隣の英国人パー

ティに聞いたら出ていけないというの

でこちらもその気になっていたところ

故等、言うことは裏腹にいたことも

なくテントを移して交えていた。

七月二十六日 今日も休養日、天気

のほうはどうも思わぬくない。不慮

な雪崩を日本へ送り返す。夜、シャモ

ニへ来て二度目の映画を見に行く。ケ

ンアンカンアンで何もわからぬ。

七月二十七日 天気は良いが、雪の

量で今日も休養日とする。生憎の日

曜日で病院も休み。前には生露丸をフ

め込んでおく。

七月二十八日 フレパンからクリエ

ルへの縦足に行く。登りのアフロケ

はローアウェイで省略する。フレパン

の頂上から縦足開始。道などありはし

ない。適当に歩きやすいところを進む

モンアランヤンヤモニ針縫製の靴めが  
素晴らしい。コルヌの池から登りフラン  
フラへ下り、私は一人でフリエルまで  
縦走する。頂上からフレグジュールの夏  
スキー場まで下り、そこからローアウ  
エイでフラの村まで降りた後、シヤモ  
ニまで歩いて戻る。

テントに寝てみたが張り紙がして  
あり、英語でフランス語ですぐに立ち  
退くようにと書いてある。明日移動す  
ることになって、又既述を見に行く。

**七月二十九日** ミデューへのローアウ  
エイ駅の近くの有料キャンプ場へ移動  
碧稜パーティも同じ所に移動する。玄  
島山岳会のメンバー四名も同様。一日  
一・四八フラン取られる。へ一人きり

**七月三十日** ゆうべの雨が上の方で  
は雪になっていた。せい分下の方まで  
白くなっている。夕方、ガイヤンの岩  
場まで行ってみる。うまいの、下手な  
の様々である。

**七月三十一日** 午後からアラン・ド  
セギューまでローアウエイで上り、フ  
レホンのナンチヨン氷河末端のモーレ  
ンでビバークする。夕方雨になり、同  
じようにビバークしていたスイスのマ  
ベックを我々の所に呼んで一緒にビバ

ークする。

**八月一日** 雪は体の調子がまだ悪く  
とても差登りする気になれないと言っ  
たので、一人でフレホンへ向う。シヤル  
モ・フレホンのコルからナンチヨンの  
コルまで縦走する。

早い分遅く歩き始めたのであるが、終  
局降りて来た時には私が三番目に早か  
った。

スペインからローアウエイからナンチヨ  
ン氷河まで預託して死んだ英人三人  
の遺体収容のため勿論の人達が働いて  
いた。

ナンチヨン氷河末端のモーレインの上  
で一人心配そうに待つていた妻とすく  
に荷をまとめシヤモニに下る

**八月二日** 休養日、あまりよくない  
天気。買物に行つて、帰りに夕立に  
やられる。食ったものがいけるか  
のかおなほはかり出て困った

**八月三日** 今日がシヤモニ最終日、  
町をモラ一寝よく見物しておく。天気  
も思わしくない。モラシーヌも終りに  
近づいた感である。碧稜パーティ  
も明日クリンデルワルトに移動する様  
子

**八月四日** ゆうべの雨でテントはビ

シヨ濡れ、仕方がないのでそのまま  
めてサックに入れ、八時過ぎり電車  
でツェルマットへ向う。国境で乗り換  
え、マルチーニからフリックまで行さ  
な、ここでツェルマット行に乗り換える。  
えらく乗り換えが多い。ツェルマット  
着午後三時半、駅近くのテント場に衣  
々もテントを持ち込む。門司山岳会も  
我々より一日早く来ていて、又々隣同  
士となる。

**八月五日** 少々賑わった。今日  
ヘルンリ小屋まで上ることにして、門  
司パーティと一緒に同じローアウエイ  
で上る。ツェルマットから約二時間  
歩いてヘルンリ小屋着。新旧二軒の小  
屋があり、我々は新しい方に泊る。新  
しい方が宿泊料が安いのである

**八月六日** 幸い天気は良い。三時半  
小屋を出る。また曇り。とほしいらい  
トの明りで先へ進む。ツェルマット小屋  
まで丁度三時間。小さい小屋でかどくキ  
クナイ、ヘルンリの肩から北壁が良く  
見える。登攀者の姿も手に取るように  
わかる。太いフィックスロープを使っ  
て頂上まで行く。かどく寒い所で長く  
はいらぬ。景色も良いが早々に退  
散。下りの方が登りよりルートがわか

りにくい。巻りと同じ時間をかけてヘルンリ小屋に着く。雪が固いといふので小屋のベツトを替りて二時間程休ませる。

シュワルツゼーがらの最後ロープウェイでツエルマツトに戻る。

八月七日 昼間 中谷氏と旅野氏が我々のテントを尋ねてきた。互いにウイン以来の旅程に話が集中し、思ひぬ時を過ぎ

夜、依寄が泊、ているホテル、パンホーフへ行き、シャワーをあげてくる。今迄、水のシャワーばかり使っていたので、湯が出るシャワーに感激。依寄は明日シャモニへ向う。三六北壁の最後の壁を目指して。

八月八日 休養日。ここでもまだ不仕等に寝た。言葉や裝備を日本へ送り返しておく。スネがほで二人乗りのスキーリフトに乗って遊びに行く。マッターホルンの眺めが素晴らしいところである。ここの高原にはモルネットに似た大きな動物がいる。隅りにミツンニル・クロの墓と山岳博物館を見ても

八月九日 クリンデルワルトへ向けて出発。フリックで乗り換え。スロツ

ツで再び乗り換え。インターラーケン東駅からクリンデルワルト行の電車に乗る。クリンデルワルトは雪が多くアイガーモ上部は雲に覆われて見えないホテル、ベルヒューへ行ったら、エミール・シュトリイさんが出て来て何かゴチャゴチャ言っていてくれ

テント場はケルント駅の近く。また門司山岳会と一緒に来た。

八月十日 天気の方はあんまりかんばしくない。今日は休養日。町に出て買い物をし、今、町中はアイガー北壁に取り付いているJ.E.C.C.パーティーのことを持ち切り。

昼からアルピタレンまで遊ばに行く。北壁は眼の前にそそり立つ。首をねじ曲げて覗くが、上部はやはり雲の中である。壁の中を大きな滝が落ちている。凄い壁である。

八月十二日 今にも降り出しそうなき様だが、頂上に行くことに決定。途中でのそき込んだ北壁は、赤黒い泥壁でとても登る気はない。頂上近くになると風も強く、それに冷たい。アイゼンを堅い氷に突き立てて登る。頂上に八時十五分登。ミッテルレギ山校

を登って来たおじいさんパーティーと同じ時に頂上に着いた。頂上の石を拾ってすぐ下る。マッターホルンに数人多とすつとやさしい下りである。出立点のアイガー・クレッチャー駅には十二時前に着いた。

八月十三日 また郵便局へ行つて不仕要な荷を日本向けに送っておく。一日中天気が悪く、アイガーも時々霧を出したけである。壁が白くなっている。

八月十四日 シャモニの時と同じく今日もまた雨の中でテントをたたき、シーメンを終りである。これからオーストリアへ行き、低い山を登って帰る計画を立てる。

オチコロルまで行って見ることにして出発。インターラーケン・オストベルン行に乗り換え。ベルンからチューリッヒまで行き、ザルツブルグ行の列車に再び乗り換え。サンアントンからツツ前のランケンで下車。駅前のホテルに泊る。ここを汽車の中にてテントを忘れてしまい大慌て、すぐ駅長にかけ合せて、ザルツブルグを降ろしておいでくれるように話をつくけおく。

八月十五日 ランデックで乗り換えて、ザルツブルクには十二時半に着く

すぐ駅内を駆け回り、昨日のテントの  
片を聞いてみるが確かな事があるが  
ない。カトリックの国では、今日は祭日  
で休みなのだそうである。それを係の  
人も今日、明日を以て明後日は出てこ  
ないから、月曜日にいらっしやいとい  
うことになってしまった。四時のバス  
に乗りベルヒテスガーテンへ行く。あ  
という間にドイツ領に入る。観光客が  
多く、ホテルがなかなか見つからず苦  
労。ゴニーク湖の湖畔のホテルにや  
つと落ち着く。それもきいたくない空でガ  
ッカリ。

**八月十六日** ひどい雨で、それも一  
日中止です。まったくいやな日である  
ベルヒテスガーテンの運動具店へ行き  
一張テントを買ってくる。それを湖の  
近くのキャンプ場を張っていたらフラ  
イがないことがわかり、その店へ取っ  
て帰すが、土曜日を午後休み、大  
で喧嘩していたら隣のアパートのおほ  
さんが出て来て、店の主人は出かけて  
いないから月曜日に来いという。雨は  
降っているし、ホテルは高いときてい  
る。アー、まったく嫌な日。

**八月十七日** 今日もう少し雨、一時  
小止みになった時、湖まで行き遊覧船

に来る。ヴァツマンは雲の中で、東壁  
の下部のほうかすこし見えるだけ。船  
の中で余興にやっていたトランペット  
がすこく良かった。湖の岩壁にこたま  
して、鏡を覗くがすような余韻といつ  
までも聞くことができた

**八月十八日** 今日また雨である。  
これはは体にカビが生えてしまふ。そ  
れにゆうべに食べたポテトフライが悪  
かったらしく、一晩中お腹をかかえて  
苦しんだ。早く日本へ帰りたいとこの  
所を思ったことはない。また例の店へ  
行きフライのことで文句をいいたら、  
それはフライが付かずにあの値段だと  
抜がした。義理堅いと聞いていたドイ  
ツ人をこの所をニクランとい思ったこ  
とはない。

さんさん悪口を言っへて、もちろん日  
本語にネバっていたら、それを二十  
日の日にもう一度来てくれという。そ  
の時、今カテントで間に合うフライを  
取り寄せておくからということをは  
ついた。アー、シンド。

**八月十九日** また雨である。一日中  
キャンプ場のレストランを通す。

**八月二十日** 待望の太陽、やっと山  
に登れる。でも今日は、テントのフラ

イを取って来なくてはいけない。午前  
中、近くの頂上まで上る。二人乗りの  
スキーリフトに乗って頂上から見廻す  
周囲の景色は板群に素晴らしい。ウァツ  
マンの東壁も顔の前である。  
午後、町の運動具店へ行き、やっと  
フライを受取ってくる。

**八月二十一日** 今日昨日に引き続  
き良い天気だろうと思っていたら、何  
のことはない。また雨である。またた  
くイライラする。残りの日数もそうな  
いというのに。  
昼食後一人で傘をさしてウァツマン  
への道を途中まで歩いてくる。日本の  
な感じの強い山である。

**八月二十二日** 今にも降って来よう  
な空模様だが、いっとう今日中に空  
の山小屋まで登っておくことにして  
登り出す。  
橋高千五百米のところにはSt. Hubert  
ヒュッテがあり、そこに泊る。ウァツ  
マンカールまで道の偵察をしておく。  
夜、ドイツの山岳兵連が勢を益々に  
来て、十二時過ぎまで飲んで歌って大  
騒ぎ。

何のことはない、我々は彼等の酒の  
ツマになつたようなものである。

八月二十三日

夜の雨は、山を一夜にして真冬にしてしまった。我々の小屋まで雪が舞い降りてくる。これでもウマツマンも完全にみくらめなればならぬ。十時頃からコニクシールのベースに引き上げる。

八月二十四日

ここに居ても、もうやることがないのでサルツフルクへ戻る。

サルツフルクには、十二時少し過ぎに着いたので、旧市街へ行きホーエンサルツフルク城を見学する。この日泊ったホテルのあたりだったこと、今迄が一番懐かであった。

八月二十五日

今迄着ていたセーターがもうホロホロになったので、妻と私の二人分、同じ色のセーターを買ってそれにオ一家くて仕様がなない。もう晩秋の感である。

ハルツユタット湖へ行くバスに乗る。バッドインシュルで乗り換えて、ゴソウミユレで下車。ここからハルツユタットまで、車をつかまえてヒツチで行く。ハルツユタットは先史以来の古い町。湖に突き出して建てられた古い家は歴史を物語っている。静かで町の人達は皆親切である。雨はまだ降っている。

もっと早くくればよかった。

八月二十六日

大変な所だが、もう我々には時間がない。雨のハルツユタットに別荘を告げてサルツフルクに戻る。帰りのバスの窓から見たオーストリアの自然は、スイスと違い大変な容力のある雄大な景色である。夜はサルツフルクの駅近くの安いペンションに泊る。

八月二十七日

列車は雨の中をウィーンへ向けて出発。我々の乗り場は放浪のよい出発点でもあり、終点でもあるウィーンへの河川の架け橋となっていた。

ウィーンは木枯しが吹いていてひどく寒い。ここを乗ってベニスへ行った日は、暑い日であった。ヨーロッパの気候の変わり方の早さをまたここで改めて知った。

駅の案内所で安いホテルを紹介してくれられたら、スチューデント・サロンの入行がされた。そこで紹介してくれた店がえらく悪いので、確かに料金は安い。これじゃどうにもならぬ。結局ここを乗出して、十時ばかり歩いたら、日航の支店が目に入ったので、コレコレと喜んでそこへ入って

近くのホテルを数えてもらった。ヨーロッパに居て始めて日本語でホテル探しのできたのはここだけである。

八月二十八日

ホテルで一回りして、くれるはずの飛行場の車がいつまでたっても現れないので、たまりかねてフロントへ行くと文句をいいたら、ヤッとしてくれた。

飛行場には、今日の便でモスクワへ行く日本人がワンサといふ。J.E.C.C.の加藤保男と榎岸氏もいた。二時間程遅れて飛行機は出発。モスクワで我々が乗る予定の飛行機がもう満員だからということ。遅々六時間待たされて、やっと臨時便に乗ることができた。

八月二十九日

飛行機は大巾に遅れ、ハバロスク着。汽車の駅まで行ったら、帰りの日本人客が多数いる。その数の多いには目撃した。やっと乗り込んだら、私と私の箱は離れてあり、えらく不便である。

八月三十日

一晩中ねむれず頭が重たい。ナホトカに着き、すぐ港へ。港には乗る時に乗ったハバロスク号が行っていた。面影な税関の検査を受けてやっと乗船。船に乗ってしまえばもうこ

ちのもの。日本に着いたも同然である。岸壁に一人バスポートをモスクワに忘れて来たのが、悲しそうに我々を見送っていた。

八月三十一日 波は静かである。但藤若達のアイガの話を聞いたりして一日を過す。夜後部デッモに出て、同室の先生方と飲んで歌って大騒ぎ。

九月一日 ゆうべからのドンチャン騒ぎは、翌朝の四時まで続き、おかげで朝になって頭が上らない。今日は日本に着く日だというのに、船内で税関申告書を書いて上陸を待つ。午後四時に横浜港着。ナカナカ上陸させてくれずイライラする。

オー日本は暑すぎる。それに車と人の多しこと。上陸した途端日本が嫌になっちゃった。

終り……

◇ 後記 ◇

簡単に旅行中のことを書き終ってしまいました。長い間夢見ていたことがいざ実現してみると、このように頑直な文章にかならない。よことにあっけないものです。

山がその人にとって、どの程度か比

重と占めるものが、それは人によってそれを肌遣うでしょうが、私のこの十年近く過ぎ去った年月は、よ、たく山そのものが生活とも言える毎日でした。私に、この十年の間は何を学んだらう。今、私は始めて過去を振り返ってみて、あまりにも空虚な私の人生がそこにあったことを知り愕然とするような次第です。

今さら自分の過去を悔やんでみてもどうなるものでもありませんが、これからの若い、特に山を熱烈に愛する人達には、私のような泣き言を言わないようにする筈にも、本心に真剣に山が自分にとって何であるのかを考えてみる必要があるでしょう。

私達はいちおう曲りなりに、ヨーロッパ旅行を無事に終えることができました。山にも登ったし、ますはうよくいったと言わべきところでもしうが私自身にしてみれば、とても満足はいくようなものでありません。

今回のことを私は、自分の不勉強さを嫌という程知らされましたし、能力の限界を知りました。日本にいる時にくらば天狗になっていた鼻がものの見事にパンパンコになってしまっていた

外に出て見ると何と自分の存在の小さいことか。そして何とよあ自分が物を知らな過ぎることか。

山が自分の世界であった時期は終ったようです。これからは、山以上にもっと大切なものを勉強しなければなりません。

※ 注釈説明

- 1 トイツ語は、ローゼンガルテンズピッツェ。
- 2 屋根から雨水を取り、地下のタンクに溜めておく。
- 3 この中に有る、ウィンクラーツルムがある。
- 4 クレイドは四級。
- 5 西という意、泉は、オリエンタル(イタリヤ語)。
- 6 現地クレイド五級。
- 7 我々は下階ルートを通すし間違えた。
- 8 公ではないが、一人五フランで泊めてくれる。
- 9 千タン製ハーケンや笹寺徳持のチカモ、ファイファイのついたチヨンホ道具、リボン製のアフミなど。

# 昭和四十五年度会員山行一覽

月日	山名	参加者
4・4・5	奥秩父 瑞幡山・金峰山	矢島 他
7	奥武蔵 日和田山	長瀬
19	新人歌謡山行(丹沢) モミソ沢 セドノ沢石段 左股	牧野 水田 池上 山田 吉原 石川 細井 笠原 南 磯木 中村 黒田
5・1・5	穂高 屏風岩茅ニルンセ(初登)	吉野 小林 奥園
3・5	八海山(春合宿) 城内口 大崎口 高倉沢	牧野 塚本 小野 黒田 南 山田 吉原 石川 池上 中田 山崎 鈴木 辻 篠原 中村
3・5	浅草岳 守門山	山根 吉野
10	谷川岳 一ノ倉沢南稜(雨退)	吉野 中村

- 10 通称ロッキン村と呼ばれる森の中  
の無料テント場
- 11 通称アレホンの登山はこれとい  
う。
- 12 スイス山岳会の山小屋
- 13 ケーニツヒ湖

月日	山名	参加者
5・10	谷川岳 西黒屋根	山県、牧野、他
10	丹沢 葛葉沢	青藤
17	丹沢 新茅沢	青藤、岡部、笠原、青藤、他
24	谷川岳 一ノ倉沢南稜	吉野、木田、中村
24	天賣山	牧野、塚取
24	妙義山 コモリ沢	青藤
6・6	苗吹川 乾徳山	中田、本沢
6・8	北岳 バットレス	吉野、木田、岡部 吉野、木田 山崎、他一名 山崎、岡部、他一名 辻、牧野、銅井
13	古賀志山(会山行) カニ尾根 ヤニ カ田 Dガリーフラント 中央稜(敗退)	牧野、矢嶋、吉田、吉野、木田、中田、辻 中村、岡部、笠原、南、青藤、黒田

7 19	30	30	30	26 5 27	14 5 17	9 5 12	13 5 15	10 5 12	1 5 3	8 1	7 19	6 14
谷川岳 4ルンゼ	西丹沢 同角沢	谷川岳 仙ノ倉岳 タイコンテロン沢	谷川岳 衝立岩オ2雲稜ルート	谷川岳北面 西セン	飯豊連峰 縦走 石コロピ沢 (夏合宿)	飯豊連峰 縦走 石コロピ沢 (夏合宿)	北岳バットレス 中平稜 オ四尾板	苗場山	西丹沢 カンナ洞 同角沢 小川谷	西丹沢 モチコツ沢	熊倉山 ヤスカ沢右股	日和田山
吉野 中村	牧野 矢嶋 黒田 南 小野目	石川	中田 吉野 木田	山県 菅野	山崎 鈴木 柳井	吉野 矢嶋 中村 南 山県 岡部 山田 斎藤	中田 本沢	石川	矢嶋 他	鈴木 黒田 池上	石川	塚越 掛川

月 日	山 名	参 加 者
9・6	谷川岳南面(合同山行) ヒツゴリ沢 オゾカ天 薬石日ルンゼ Cルンゼ(隊)	鈴木 南 笠原 斉藤 木田 柳井 黒田 吉野 田黒 岡部 遠藤 中村
13・15	穂高 北尾根 明神岳	鈴木 池上 黒田 辻 隆原 牧野 遠藤 梶川 南
10・11	谷川岳 一ノ倉沢2ルンゼ(雨天退却)	細井 中村
10・11	尾瀬	石川 矢嶋 他一名
10・11	秩父 二子山	牧野 南 野田 青藤 大橋
18	谷川岳 マチガ沢	吉野 青藤 大橋
25	尾瀬(市民ハイク)	石川 天崎 青藤
4	古賀志山(合同山行 遠征対策訓練)	13名参加
11・1	後立山連峰 杓子岳東尾根	細井

46 1 2	30 3 46 1 2	ハケ岳 横岳西面 (冬期台宿) 研曹岳く楠岳 裏向ルンゼ 中山尾根 日ノ岳稜 小回心クラック 赤岳(一般ルート)	46 1 2	ハケ岳 阿弥陀岳南稜く小回心クラック	中村 南
25 30	25 30	東吉幸山	25 30	秩父 雁坂峠く甲武信岳 秩父(二子山)	石川 池上 笹原
12 6 7	12 6 7	谷川岳 西尾根(西上訓練)	12 6 7	秩父 雁坂峠く甲武信岳	牧野 天徳 南 山田 岡部 吉藤
22 23	22 23	仙ノ倉山(イイ沢左股)く干櫛山	22 23	秩父 雁坂峠く甲武信岳	牧野 池上 南 吉藤
22	22	富士山 (吉田口)	22	秩父 雁坂峠く甲武信岳	牧野 中田 天徳 細井 吉野 南 吉藤
15	15	天竜山(会山行)	15	秩父 雁坂峠く甲武信岳	笹原 岡部 石川
8	8	西丹沢 箱根屋沢	8	秩父 雁坂峠く甲武信岳	吉野 木田 細井 吉藤 南
6	6	秩父(二子山)	6	秩父 雁坂峠く甲武信岳	石川 天嶋
11 1 3	11 1 3	ハケ岳 阿弥陀岳南稜く小回心クラック	11 1 3	秩父 雁坂峠く甲武信岳	9名参加
					山梨 他

月 日	山 名	参 加 者
1・10	黒班山 (冬期合宿) 赤丘主菱 ホコケルンセ 大同ヒルンゼ	吉田 中村 吉野 不田 池上 岡部 斎藤 牧野 矢嶋 細井
10	日和田山	石川 牧野 笠原
16・17	西丹沢 ガンザ河 同角沢	中村 南
31	三ツ峠 コーモリ沢	吉野 中村
30・31	ハケ岳 広河原沢左股	牧野 矢嶋
2・11	日和田山	斎藤 黒田 細井 吉田夫妻
10・5・11	西丹沢 松河沢	出泉
21	三ツ峠(会山行) コーモリ沢 マムツ沢	石川 矢嶋 南 吉野 中村 斎藤
3・14	谷川岳 西黒尾根(会山行)	牧野 吉野 矢嶋 笠原 中村 岡部 山田 黒田 南 笠原 池上

3・14	三ヶ峠 南アルプス 角兵衛沢くま窪	甲府南	吉野 中村
------	----------------------	-----	-------

◎この山行一覽は、山話会の前上で報告のある、たもので、昭和四十五年四月から翌四十六年三月までのものを掲載しました。

# た わ ご と

尋い問 発行されなかつた台帳で、ようやく二十巻と附すことができた。六月の初めに発行すると大夏頃を切った午前、夏ばかりあせって一向に帳簿の先が過ぎます。一ヶ月半も遅延してしまつた。

ようやく出したこの二十巻も、誤字、脱字、それに読みにくい字が目につくかも知れない。また、四十五年度のものをもまとめるのでせい一杯であつた。

四十五年度の会山行を囃さ進んで掲載したかつたのだが、原稿がなく、それに編集するがら気がついたので、四十五年度と四十七年度とでは、丸二年の隔りがあり、いくらかの地抗と矛盾を感じた次第である。ある者は去りまたある者は……と新隊代謝の激しい社会人山伍会において、会報の持つ意味は、たと身の程知らぬ考えなど起してはみたものの結論は出る。

とにかく、原稿を出してもらいたい。内容は何でもいい。記録、随筆、随想、詩、山にまつわる伝説、何でもいいのだ。自分ひとりの心にまっけておかず、他の会報にも心を分けて欲しいのだ。それが山男である。山男の集りではないのかな……

◇ ◇ ◇

村

次号(二十一号)は、四十六年度の山行を主に、特に春・冬と天幕を張つた鹿島嶺ヶ岳を中心にしたと言えていきますので、さきと違つて早く出す記事、文庫、随筆等とんどん係へ提出してください。もちろん鹿島嶺以外のものでも結構です。

なお、発行予定日は未定ですが、今年中にはなんとか出したいと思つています。

係

発行日	昭和四十七年七月十五日
発行所	浦和溪後山岳会
	浦和市梅郷一―一五
	山縣昌彦方
	電話(86)八二〇六
発行責任者	会長 山縣昌彦
編集・筆耕	会報係 中村博明
系 接	第二十号

